



2013年度 成果概要②

「仏教・浄土教を機軸としたグリーフサポートと救済観の総合的研究」

Research on Grief Support and Salvation based on Pure Land Buddhism Thought

人間・科学・宗教オープンリサーチセンター長  
鍋島直樹

### ■ CHSR 国際シンポジウム 2013

「実践伝道学とチャプレンシー 人間の苦悩に向き合う仏教の慈悲」

Practical Ministry and Chaplaincy

: Buddhist Compassion in Response to Human Distress

Thursday, Sep 26, 13:15 - 14:45

Omiya campus Seiwakan 3F, Auditorium

来場者 170 名

Thursday, Sep 26, 13:15 - 14:45

Omiya campus Seiwakan 3F, Auditorium

13:15-

Opening Remarks

Naoki Nabeshima (Director of CHSR)

13:30-14:30

Special Lecture

Tomoyasu Naito (Department Head and Professor of Shin Buddhist Studies, Ryukoku University)

“The Realm Where We Can Meet Again” (Japanese)

14:30-14:45

Responses

Friday, Sep 27, 13:15 - 17:00

Omiya campus Seiwakan 3F, Auditorium

13:15 – 13:20

Introduction of Keynote Speaker

Interpreter:

Eisho Nasu (Professor of Shin Buddhist Studies, Ryukoku University)

13:20 – 14:20

Keynote Address1:

Daijaku Judith Kinst (Director of the Buddhist Chaplaincy Degree Program, Institute of Buddhist Studies)

“What Makes Buddhist Chaplaincy Buddhist?: Developing an Educational Foundation for Buddhist Chaplains and Ministers in a Multi-Tradition and Multi-Faith Setting.

14:20 – 14:35

Respondent: Nobuhiro Fukagawa (Professor of Shin Buddhist Studies, Ryukoku University)

14:45 – 15:00

Intermission

15:00 – 15:05

Introduction of Keynote Speaker

15:05 – 16:05

Keynote Address2:

Richard K. Payne (Dean, Professor of Japanese Buddhist Studies, Institute of Buddhist Studies)

“To Whom Does "Kisa Gotami" Speak? Audience Reception, Interpretation, and Therapeutic Application”

Introduction of Keynote Speaker

16:05 – 16:20

Respondent: Akio Tatsudani (Professor of Shin Buddhist Studies, Ryukoku University)

16:20 – 16:50

Free Discussion

16:50

Closing Remarks

Conference Organizer:

Naoki Nabeshima (Professor of Shin Buddhist Studies, Ryukoku University),

Yoshiyuki Inoue (Associate Professor of Shin Buddhist Studies, Ryukoku University)

Koji Tamaki (Professor of Shin Buddhist Studies, Ryukoku University)

Kayoko Kurokawa (Associate Professor of Social Welfare Studies, Ryukoku University)

This event is cosponsored by:

Center for Humanities, Science and Religion, Ryukoku University

Institute of Buddhist Studies

Religion Department, Ryukoku University

## 国際シンポジウム2013の開催趣旨

このシンポジウムでは、第一に、親鸞教学における浄土の真意を真宗学の角度から考える。内藤知康教授より「また会える世界」に関する特別講義をいただいた。第二に、2009年に米国の仏教大学院で初の仏教チャプレンの養成プログラムが始まった。そのプログラム代表のダイジャク・ジュディス・キンスト先生を米国から招き、人々の苦悩に寄り添い、希望の灯りをともす仏教を背景としたチャプレン養成の目的と意義について考える。チャプレンとは病院、警察、被災地などで人々の苦悩に寄り添う臨床宗教師である。日本でもビハラの病院、社会福祉施設、東日本大震災の被災地で求められている。また、キサゴータミーは家族と子どもを亡くして悲しみにくれていたが、釈尊の寄り添いと助言によって悲しみから立ち上がった女性である。リチャードペイン教授の基調講演は、そのキサゴータミーの物語の意義に光をあてた。

### 成果概要

米国仏教大学院(Institute of Buddhist Studies, Berkeley, California)における Buddhist Chaplaincy Program は、2009年に始められた。仏教によるチャプレン養成プログラムは全米初である。それは大学院におけるキリスト教をベースにしたチャプレン養成プログラムである。その仏教チャプレン養成プログラム代表のダイジャク・キンストの研究論文“**What Makes Buddhist Chaplaincy Buddhist?: Developing an Educational Foundation for Buddhist Chaplains and Ministers in a Multi-Tradition and Multi-Faith Setting.**”に依りながら、成果の概要をふりかえっておきたい。チャプレンは特定の宗教教団の伝統布教を目的としない。チャプレンの目的は相手の価値観と目的に従って、ケアを提供することである。そのチャプレン養成プログラムは、第一に、仏教と心理学やパストラルケアの研究を相互に連携させている。第二に、仏教を基盤としつつ、多様な信仰が共存する社会においても適用可能な評価基準と宗教的対応を示すことが必要である。第三に、仏教チャプレンが、それぞれの伝道場において、生涯にわたって勤める支えとなる、仏法の主体的基盤を開拓することが必要である。心静かに、注意深く他者の言葉に耳を傾け、問題に適切に対応する能力は、仏陀の教えの実践的適用である。この仏教チャプレンシー教育の提唱者であるポーラ・アライは、10の癒しの原理について論じている。その原理は仏法に根付いている。「一瞬を完全に生きること、あるがままの物と調和的に生きること、それは無常であり、相互関連的であり、全ての状況において感謝の気持ちを育む」。こうした姿勢と対極にあるのは、深い孤独感、疎外感と、飽くことをしらない物に対する欲望から現れる苦悩と恐れであるとポーラ・アライはしている。その10の癒しの原理とは、1. 相互関係性を体験すること、心身一如で生きること、3. 儀礼に参加すること、4. 自己を養うこと、5. 生きることをエンジョイすること、6. 美を創造すること、7. 感謝の気持ちを養うこと、8. 現実をありのままに受け入れること、9. 視野を広げること、10. 慈悲の心を身につけること、である。こうした仏教パストラルケアのモデルが米国仏教大学院で進められている。ここより新たに気づいた知見は次の

通りである。仏教チャプレンシープログラムとは、欧米のチャプレンに学び、宗教者が布教伝道を目的とせず、苦難の中にある相手の価値観や人生観や死生観を尊重し、その悲しみに寄り添い、生きぬく希望を与えることを目指している。しかも、仏教チャプレンシープログラムは、仏教の特色である縁起的生命観や無常観、中道を機軸としている。ひとは独りでいきているのではない。他の誰かに生かされている。諸行は無常である。しかし、無常の中に涅槃への道が開かれている。快樂か苦行かという両極端な生き方に偏らず、中道を精進して歩むところにその涅槃への道がある。そうした仏教が仏教チャプレンシープログラムの根底にある。あわせて特に、その仏教チャプレンシープログラムは、浄土真宗の特色である報恩感謝、御同行御同朋の精神に基づく社会実践プログラムである。苦難にある人々が、一人ひとり阿弥陀如来の大悲にいだかれ、願われているというぬくもりとおかげさまのなかで展開しているといえるだろう。

このシンポジウムの意義について、アメリカの米国仏教大学院（IBS）のホームページ（Wednesday, November 06, 2013,）において、Prof. Seigen Yamaoka は、次のように報告している。

*Everything tagged with chaplaincy*

International Center for Humanities, Science, and Religion Symposium

Dr. Richard Payne, Dean of the Institute of Buddhist Studies, and the Rev. Dr. Daijaku Kinst, IBS Chaplaincy Program Director, participated in a Ryukoku University International Symposium on September 26-27, 2013, at the Omiya Campus, Kyoto, Japan. The program was sponsored by the International Center for Humanities, Science, and Religion (CHRS).

The theme of the symposium was: “Practical Ministry and Chaplaincy: Buddhist Compassion in Response to Human Distress.” Professor Tomoyasu Naito, Head of the Department of Shin Buddhist Studies and Practical Shin Buddhist Studies, spoke on the importance of peace of mind in his address, “Meeting Together at One Place and the Meaning of Peace of Mind in the Jodo Shinshu Tradition.”

Dr. Payne’s paper was titled, “To Whom Does Kisagotami Speak? Audience Reception, Interpretation, and Therapeutic Action.” He spoke on the importance of tailoring one’s response to the specific person and circumstances one encounters. Dr. Kinst discussed the IBS chaplaincy program models for pastoral care based directly on Buddhist teachings in her papers “What Makes Buddhist Chaplaincy Buddhist? Developing an Educational Foundation for Buddhist Chaplains in a Multi-Tradition and Multi-Faith Setting.”

Responses were made by Professor Nobuhiro Fukagawa and Professor Akio Tatsutani for Dr. Kinst and Dr. Payne's papers respectively. Professor Naoki Nabeshima, Director of CHSR, joined in on the discussion following the presentations.

"The conference provided the exploration of different aspects of Buddhist practical ministry and chaplaincy and the important ways we can learn from one another," stated Dr. Kinst.



Panel left to right: Prof Fukagawa, Prof. Tatsudani, Dr. Kinst, Dr. Payne, Dr. Eisho Nasu, and Prof. Nabeshima

(出典 <http://www.shin-ibs.edu/news-events/?tag=chaplaincy>)

## ■特別講義 (UNIT 2)

### 「ビハーラクリニックにおける緩和ケアと宗教」

講師 大嶋健三郎 (あそかビハーラクリニック院長・緩和ケア医。大学病院の緩和ケアを考える世話人。医学博士)

司会 鍋島直樹 (龍谷大学文学部教授)

日時 2013年6月6日

場所 龍谷大学大宮学舎 清風館 B101 教室

参加者 58名

大学院実践真宗学研究科「ビハーラ活動論」特別講義として開催。

## ■シンポジウム (UNIT 2)

### 「緩和ケアと仏教の融合—ビハーラクリニックの挑戦」

講師 新堀いずみ (あそか第2病院ビハーラクリニック看護部長、写真療法家)  
講師 花岡尚樹 (あそか第2病院ビハーラクリニック常駐僧侶、ビハーラ室室長)  
講師 大嶋健三郎 (あそかビハーラクリニック院長・緩和ケア医)  
コーディネーター 鍋島直樹 (龍谷大学文学部教授)  
日時 2014年2月15日13時30分～15時45分  
場所 龍谷大学響都ホール 参加者102名  
共催 龍谷大学REC事業部・龍谷大学人間・科学・宗教オープンリサーチセンター

#### 成果概要

「死にゆく時に大切にしたいことは何か？」

大嶋医師は、2013年6月6日の特別講義で大学院生に問いかけた。それは大切な人との時間である。1967年、イギリスにセントクリストファーズホスピスを設立したシリーソンドースは、「あなたはあなたのままで大切です」という精神で、患者に接した。残された自分の人生をどうすごすのか、患者の全人的苦痛を医療と宗教との協力によってどう支えたらよいかについて、ビハーラクリニックの大嶋院長が特別講義で明らかにした。

また、人生の最後をどのように迎えるかについて、医療と仏教との両面から考えるシンポジウムが、2014年2月15日に開催された。あそか第2病院ビハーラクリニックの大嶋院長、新堀看護部長、僧侶の花岡ビハーラ僧の三名が発表し、医療者と僧侶とのチームによる緩和ケアの理念と実際について発表した。

あそか第2診療所(あそかビハーラクリニック)は、浄土真宗本願寺派との関係の深い、財団法人大日本仏教慈善会財団(明治34年設立)が開設母体となり、親鸞聖人750回大遠忌事業の一環として、隣接する特別養護老人ホーム「ビハーラ本願寺」とともに、2008(平成20)年4月1日に開設された。あそかビハーラクリニックは19床の有床診療所で、緩和ケアを実践し、終末医療に携わっている。2014年からは、医師が3名となり、診療所から病院へと展開する。また当クリニックでは、在宅療養支援診療所として在宅医療に取り組んでいる。

新堀いずみ(あそかビハーラクリニック看護部長)

新堀看護師は、横浜厚生病院でホスピスナースをしたことが縁で、緩和ケアにたずさわるようになった。京都市の薬師山病院、大阪府寝屋川市の小松病院における看護師の経験を積み重ねて、現在、あそかビハーラクリニックの看護部長として勤めている。健康をめざすことを主眼とする医療が多い中で、あそかビハーラクリニックは、「ぬくも

りとおかげさま」をめざしているところに彼女は心ひかれた。あそかビハーラクリニックの基本理念と基本方針は、次のように示されている。

#### 基本理念

あそかビハーラクリニックは、願われないのちを共に生きるひとときに、仏の慈悲に照らされている「ぬくもり」と「おかげさま」の心で、安らぎの医療を実践します。

#### 基本方針

1. あなたと家族、すべてのスタッフの間に、温かいコミュニケーションに基づく信頼関係を築きます。
2. あなたを悩ます痛みや不快な症状を緩和します。
3. 限りあるいのちの中で見出す真実を真摯に受け止めます。
4. あなたと家族が希望する場所で、あなたらしく時を過ごせるよう支えます。
5. あなたと家族が望むときに、家族がケアに参加できるように援助します。
6. 愛する人と別れなければならない苦しみに、療養中から死別した後まで寄り添います。
7. 他の医療機関と連携し、地域と共に歩むクリニックをめざします。
8. ビハーラの施設として質の高いケアを提供できるよう、研修・教育に努めます。

「ビハーラ」とは、サンスクリット語（インドの古語）で、「心身のやすらぎ」「休息の場所」「精舎・僧院」を意味する。西本願寺では、昭和62年より、仏教・医療・福祉のチームワークによって、支援を求めている人びとを孤独のなかに置き去りにしないように、その心の不安に寄り添い、少しでも苦悩を和らげようとする活動として、ビハーラ活動を推進してきた。

近代ホスピスの始まりは、アイルランドのメアリーエイケンヘッドによる。また、ナイチンゲールは、「私たちにできることは手でみることである」と語っている。日本仏教における病院や社会福祉施設の起源は、『四天王寺縁起』によれば、聖徳太子が四天王寺を建設するにあたり、「四箇院の制」をとったことに由来する。四箇院とは、敬田院、施薬院、療病院、悲田院の四施設をさす。敬田院は寺院、施薬院は薬局、療病院は病院、悲田院は病者や身寄りのない老人などのための社会福祉施設にあたる。患者に共感することはむずかしいが、思いやることはできる。新堀いずみ看護部長は、「思い出は過去ではなく、今を生きる糧である」という言葉を紹介し、患者と家族に、「ぬくもりとおかげさま」という幸せを感じられるような緩和ケアをめざしていると提言した。また、新堀看護部長は、写真療法家でもある。からだが思うように動かない患者でも、シャッターを押すわずかな力があれば、写真を撮ることができる。ある日、患者がきれいな虹を発見した。そのそばで、新堀看護部長は、患者と同じ方向に目を向けてシャッ

ターを押した。その写真には空にかかる幻想的な虹が写っていた。その写真はそのまま、いっしょにいた患者がその時、虹を発見し、うれしかった気持ちも写しだされているようだった。写真療法とは、患者やそのそばにいる人が撮影した写真を通して、患者の心を感じた景色が輝きを放って残り、心を慰めることである。また、その写真を通して、患者が誰かといっしょにその時の喜びや悲しみをわかちあうことができることを学んだ。

花岡尚樹（あそかビハーラクリニック常駐僧侶）

人生の終末において、患者にとって心の支えとなるのは、主に、家族や医師、看護師である。アンケート統計によれば、宗教者が心の支えとなるという人は、4.7%でしかない。僧侶が病院に来ると、「何かあったの？」と尋ねられることが多かった。ビハーラクリニックにおける常駐僧侶は、自分自身の無力さを知りつつ、医療スタッフと共に、患者のためにどのようなことができるかを考えて患者や家族に接している。仏教において苦とは、思い通りにならないことであり、「不如意」を意味する。僧侶の役割は、意味を与える存在である。過去を変えることはできないが、意味を変えることはできる。ビハーラクリニックには、ビハーラホールという阿弥陀如来を安置した仏間がある。人間と人間との水平の関わりだけでなく、仏との縦の関わりがそこにある。仏様と相談するという空間である。ビハーラクリニックやビハーラホールでは、その人らしさを支えることを尊重する。ペットとの交流、お酒を楽しむこと、写経、お菓子作り、写真展が催される。

「悲しみは悲しみを知る悲しみに救われ、涙は涙にそそがれる涙にたすけらる。」  
（金子大栄『歎異抄領解』）

花岡医師はこの金子大栄の言葉を鑑にしている。いっしょに泣いてくれた人が一番うれしい。そういう経験があった。ビハーラクリニックで亡くなると、お別れ会がある。そのお別れ会の際に、「親はのりこえるものではなかった。親の背中を見て生きる」と語ってくれた家族がいた。僧侶として言い聞かせていることがある。「私の無駄に過ごした今日は、昨日亡くなった方にとって、生きていたかった時間である。」という想いである。どれだけ生きたかではなく、どう生きたかを大切にしたい。

大嶋健三郎（あそかビハーラクリニック院長、緩和ケア医）

死から生といのちを考える。そのスタンスで、患者に寄り添っている。患者に笑顔が生まれるように、その人らしく生きられるようにチームで支えている。その患者が大切にしてきたものを尊重する。緩和ケアの姿勢を表す言葉に、“Not doing but being.” という言葉がある。「何かをすることではなくてそばにいること」が看取りの基本である。その人にしかない物語に寄り添うことをめざしている。吐血してしまう患者には、赤いブランケットをかけて最期を看取る。それがホスピスにおけるぬくもりのあるケアで



ある。”Do not curse the darkness. But light a candle.” 「暗闇を罵るのではなくて、一本のろうそくをともそう」。そういう姿勢でありたい。

37歳の男性は、病気が進行する中でも、一度は、野球で戦う姿を子供に見せたかった。その男性の気持ちを大嶋医師はそのまま受け止め、医療処置を施して、バッテリーボックスに立てるようにした。ただし、その男性に、フルスイングをしてはならないと忠告した。その男性は喜んでユニホームを着て、右バッテリーボックスに立った。家族の見守る前で、彼はフルスイングをした。その後、彼は倒れたが一命をとりとめた。本当によかった。患者の人生は患者自身の生である。「向き合うこと、逃げないこと」。その姿勢と勇気をもちつづけたい。

44歳の女性は、病気のため、排せつ物が自然にでてしまう状態であった。その女性は面会をすべて断りつづけた。それでも夜になると、彼女はナースコールを押して、自分のつらい胸の内を話した。「何のために生きているのか」。答えのない問いが投げかけられた。大嶋医師は、「あなたにけるよい言葉は見つかりません。でも、もう少しいさせてください」とそばにいた。ある日、彼女は、お風呂に入ってみた。気持ちよさそうだった。入浴後、彼女は笑顔でガッツポーズを見せて写真を撮った。それは最高の彼女の笑顔だった。

ビハーラクリニックでは、患者の望む食事をできるだけもてなす。手料理のラーメン、ずわいがに、たこ焼き、季節を感じる鮎、鱧、鰻。中でも、たこ焼きは、流動食にもなり、患者にとっておいしくて栄養となっている。京都の本格的なお寿司屋に頼んで、鯛や鮪のお刺身の豪華な盛り合わせをふるまったこともある。大嶋院長自ら、患者たちにお刺身を届けた。

48歳の女性は、最後の力で家族旅行をした。そしてガーデンテラスでパーティを開いた。彼女に満面の笑顔があふれ、記念撮影した。それからしばらくして、彼女は亡くなった。しかし、家族は、あの日のパーティで彼女が笑っていたことを思い出す。患者の笑顔が亡き後も、家族を支えている。時間の長さではなく、その患者と家族の残された時間の人生設計を誤らないように支援する。先延ばしにしない。それが緩和ケアの姿勢であると大嶋医師は語った。

ノーマ・コーネット・マレックが、水辺で溺れて10歳で亡くなった息子へ残した詩がある。その詩を、大嶋医師が朗読して紹介した。

『最後だとわかっていたなら』

作・ノーマ・コーネット・マレック / 訳・佐川 睦

サンクチュアリ出版、2007年

あなたが眠りにつくのを見るのが  
最後だとわかっていたら

わたしは もっとちゃんとカバーをかけて  
神様にその魂を守ってくださるように  
祈っただろう

あなたがドアを出て行くのを見るのが  
最後だとわかっていたら  
わたしは あなたを抱きしめて キスをして  
そしてまたもう一度呼び寄せて  
抱きしめただろう

あなたが喜びに満ちた声をあげるのを聞くのが  
最後だとわかっていたら  
わたしは その一部始終をビデオにとって  
毎日繰り返し見ただろう

あなたは言わなくても  
分かってくれていたかもしれないけれど  
最後だとわかっていたら  
一言だけでもいい・・・「あなたを愛してる」と  
わたしは 伝えただろう

たしかにいつも明日はやってくる  
でももしそれがわたしの勘違いで  
今日で全てが終わるのだとしたら、  
わたしは 今日  
どんなにあなたを愛しているか 伝えたい

そして わたしたちは 忘れないようにしたい

若い人にも 年老いた人にも  
明日は誰にも約束されていないのだということを  
愛する人を抱きしめられるのは  
今日が最後になるかもしれないことを

明日が来るのを待っているなら  
今日でもいいはず

もし明日が来ないとしたら  
あなたは今日を後悔するだろうから

微笑みや 抱擁や キスをするための  
ほんのちょっとの時間を  
どうして惜しんだのかと  
忙しさを理由に  
その人の最後の願いとなってしまったことを  
どうして してあげられなかったのかと

だから 今日  
あなたの大切な人たちを  
しっかりと抱きしめよう  
そして その人を愛していること  
いつでも  
いつまでも 大切な存在だということを  
そっと伝えよう

「ごめんね」や「許してね」や  
「ありがとう」や「気にしないで」を  
伝える時を持とう そうすれば  
もし明日が来ないとしても  
あなたは今日を後悔しないだろうから

患者が笑顔になるように支え、今日を生きる患者のために尽くしたい。

花岡ビハーラ僧は、いつも肩に椅子をかけて、患者と散歩に出かける。患者が疲れたら、どこでも座れるようにという思いからである。ある女性がプロデュースしたバレンタインデーがあった。その日、庭に出るとわずかに梅が咲いていた。咲いている梅の花の枝を折って、車いすにすわっている彼女に手渡した。彼女はとびっきりの笑顔になった。

ビハーラクリニックでは、患者が亡くなった後、ビハーラホールでお別れ会をする。ワインが大好きだった女性を偲んで、ご遺体の周りに集まって、家族もビハーラクリニックの医師、看護師、僧侶もいっしょに、シャンパンで献杯した。泣きながらも、笑顔がうまれた。

最後に、大嶋医師は、英国の小児ホスピスの医師による「若者とヒトデ」という詩を紹介してくれた。

若者が海岸の波打ち際に打ちよせられたヒトデを海に投げ返していました。  
波で打ちよせられたヒトデは太陽の光で乾いて死んでしまいます。  
若者はヒトデを見つけると、拾っては海にもう一度投げ返していました。  
通りかかった人が、  
「いくら投げても世界中で何千何万のヒトデが波で浜辺に打ち上げられ、太陽の光で死んでしまう。1つ2つのヒトデを海に投げ返しても、それは意味のないことだよ」  
と若者に話しかけました。  
すると若者は、  
「でも私の手の中のヒトデにとっては意味のあることです」  
と答えました。  
そして、若者はまた1つヒトデを拾って海に投げ返ししました。

手の中にあるヒトデ、それは、不思議にも縁があってであった患者一人ひとりである。その患者自身のために大嶋医師たちはチームを組んで緩和ケアにあたっている。講演を聞いて、深く感動し、その余韻が今も心に残っている。彼らの緩和ケアの仕事を、彼らのハートを心から誇りに思う。